
さよなら三角

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら三角

【Nコード】

N5798P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

子どもの頃のどうしようもない気持ちを書きました。自サイトでも公開中。

子どもって、どうしようもない。

親のお金で生きているんだからしょうがない。

引っ越しなんてしたくない。

絶対に。

「ほら、真美。新しい家を見に行くぞ！」

週末になるとお父さんは、車に私と母と弟を乗せて新しい家を見に行く。

お父さんは、事業で成功した。

だから、そのお金でとつともなくでかい家を建てた。

四人で住むのに、部屋が七つもあった。

トイレも二つ。

庭には池があつて（鯉を今度貰ってくるって言つてた）、緑色の芝生も生えていた。

お茶室もあつて、「水屋^{みづや}」っていうのまである。

お風呂も二つ、おまけにサウナまであった。

掃除機なんて、ノズルを各部屋の壁にある穴に差し込んでスイッチを入れると使えるようなもので（つまり掃除機をガラガラと押すことはない）妙な感じだった。

まだ、コンクリートが乾かないとかで、入居はしていない。

そんながらんとした家の中を、弟は走り回っている。

「真美、凄いだろう。お父さん、がんばっただろう。おまえたちが転校しなくてもいいようにこの土地を見つけたんだぞ」

誇らしげなお父さんのそんな顔を見てみると、むかついてくる。

「家なんて、建ててなんて言ってないもんね」

こら、真美、とお母さんが言う。

お父さんも顔をしかめる。

「転校しなくていいなんて、そんなの誤魔化しじゃん。だって、本当はここって隣の学校の学区だよ。越境じゃん。嘘つき」

そんな言葉を言い捨てて、自分の部屋に走っていく。

部屋は日当たりがよくて、おまけに部屋からバルコニーに出られた。

窓からは梅の花が咲いているのが見えて、とてものかな風景だった。

でも、私の心は真黒な嵐がぐるんぐるんに吹き荒れていた。

「新しい家なんて、欲しくない」

大きい家になんて住みたくない。

今の、あの路地にある、小さな家が大好きだった。

木の階段とか、昇ることが出来る屋根の上とか。

そして、路地に並んだ家々。

大好きな由美子ちゃん、咲ちゃん、庸ちゃん、友くん、淳ちゃん。

そして、初めて好きになった、今でもとってもとっても大好きな祥くん。

あの場所に、私はいたかった。

大事なものは、人だった。

場所だった。

たくさん遊んで、いたずらをして。

真っ暗になるまで遊び呆けた、そのことだった。

いくら大きくて、立派でも。
こんな家。
ちつとも欲しくない。

お父さんなんて。
お父さんなんて。
全くなんにも分かっていないんだ。

私たちの為に、なんて。
そんなの嘘だ。
自分が建てたいから建てたのに。
恩着せがましくそんなことを言うのが、嫌だ。

家も、お父さんも大嫌い。
嫌い。

「お姉ちゃん」
走り回っていたはずの弟が部屋の扉を開けた。
「ご飯、食べに行くって。どこがいいか、ってお父さんが聞いたよ」

「分かった」
床にペタンと座ったまま、私は答えた。
弟も、ペタンと座る。
「この家、なんか要塞みたいだなあ」
しみじみとした声で、弟が言う。

「誰かと戦うのかなあ、お父さんは」
そんなことも言う。

戦う、かあ。

お父さんの顔色はいつも悪かった。
夜は私が寝たあとに帰ってきて、朝は私が学校に行く前に仕事に出ていた。

「いこっか」

弟に声をかける。
弟も立ち上がる。

「『住めば都』だって」

「なにそれ」

「お母さんが溜息つきながら言ってたよ」
「ふーん」

ふーん。

お母さんは大人だけど。
それでも、お母さんはお母さんの思う通りには生きられないのか
もしれない。

「さよなら、三角　また来て四角
弟が歌いだす。」

それは、最近学校で流行っている歌だった。

「四角は豆腐　豆腐は白い」

「白いはウサギ　ウサギは跳ねる」

「跳ねるはカエル　カエルは青い」

「青いは葉っぱ　葉っぱはゆれる」

「ゆれるは幽霊　幽霊は消える」

「消えるは電気　電気は光る」

そこで私と弟は顔を見合わせる。

「光るはおやじのハゲ頭！」

そう言って大笑いした。

「おまえらー！　誰がはげているってえー？」
お父さんがのそりと私たちの後ろに立った。

そして逃げようとした私たちを後ろからぎゅっと抱きしめてきた。

「うえー！　親父臭いー！」

私たちはそう言いながらジタバタとした。

「なあ、ふたりとも。昼飯、何が食べたい？」
お父さんが聞く。

「龍々軒のラーメン！」

弟と私の声が揃う。

その答えに、お父さんは苦笑いしながら、「じゃあ、行くか」と言った。

お父さんが行きたいレストランよりも、今の家の側にあるラーメン屋が一番のご馳走だった。
そう思ってたけど。

けど。

お父さんの笑った顔を見て、今日だけは我慢してあげようと思った。

「私、レストランでもいいよ」

お父さんの背中に言う。

お父さんがくるつと振向く。

「おっ？　そうか？」

「ラーメンのあるレストランがいいなあ」

弟がそんなことを言う。

「ラーメンは、そうだなあ。じゃあ、中華のレスランにいくか？」

お父さんの顔がぱつと明るくなった。

大人も、結構大変なのかもしれない。
なんか、そう思った。

新しい車の匂いが嫌で、窓を開ける。
目に映る景色が、びゅんびゅん移動する。

一瞬。

大好きな今の家の側の風景が、窓の向こうから飛び込んできた。

もうすぐしたら、あそこには帰れなくて。

あそこは、本当にただ前を過ぎる景色の一つになるんだろうなあ、
と思った。

そして、私があそこからいなくなっても、何が変わるということでもなくみんなそれぞれで遊んでいるのだろう。

そう思うと、悲しくなった。

でも、一人でこのまま今の家に住み続けるわけにはいかない。

弟は私がいないと宿題をやらないし、お母さんだって私がいないと淋しいと思う。

お父さんは、私がいなくても、どうなのかは分らないけれど。

けど。

中華のレストランに行くには、人数が多いほうがいいと思うしさ。

さよなら三角

またきて四角。

遠くなる景色を見ながら、私はそつとそうつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5798p/>

さよなら三角

2011年4月28日12時41分発行